

744D-14

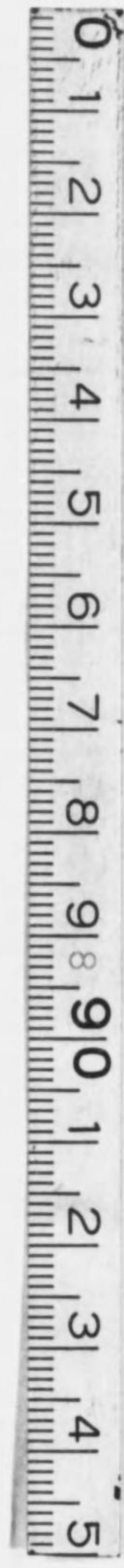
特 248

357

福良竹亭氏講演

古代支那鐵物語

大阪鐵商雨露會



始





はしがき

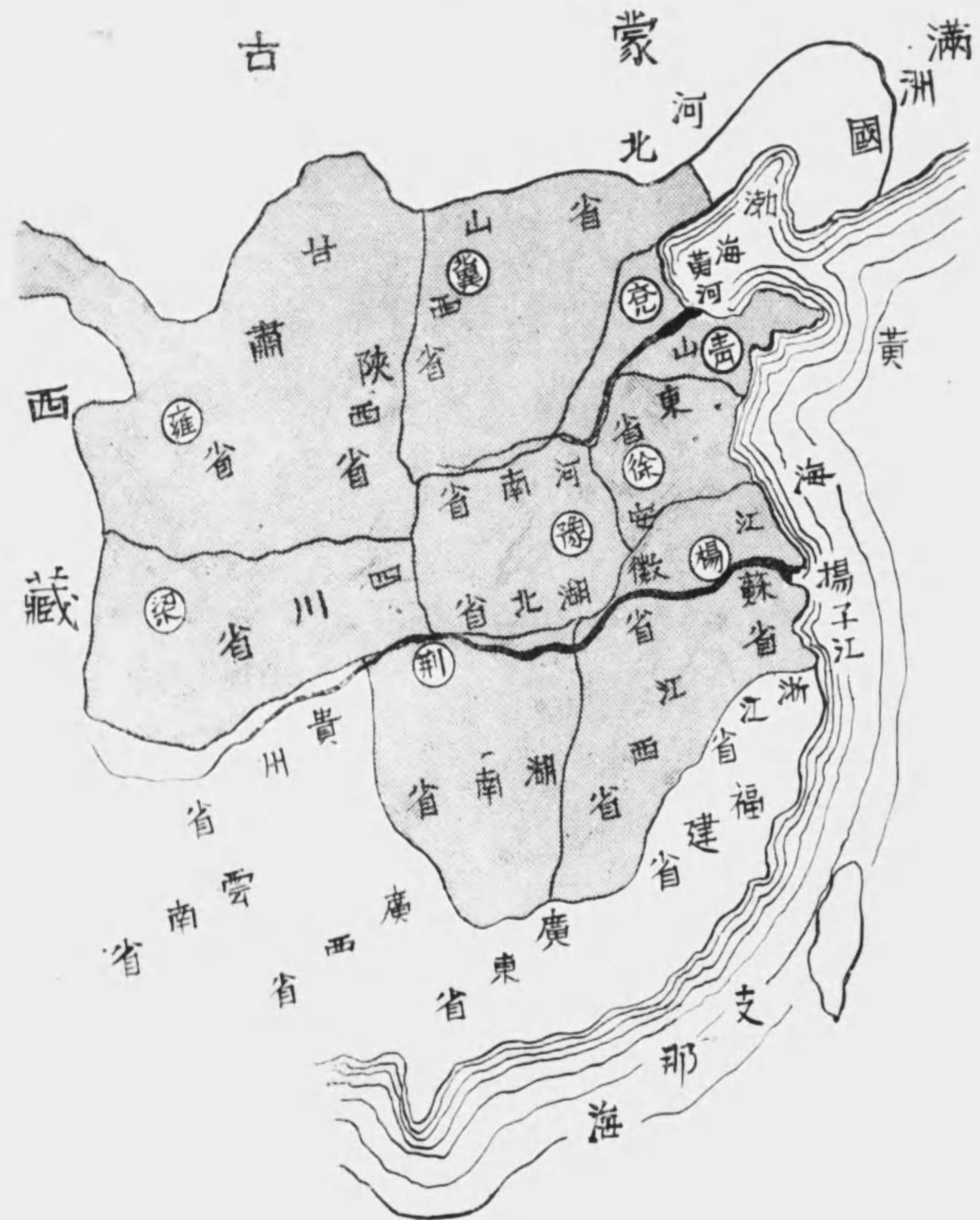
この冊子は去る九月十日大阪平和クラブで催された雨露會(少壯鐵商の團體)で私の講演したのを日本工業新聞に連載したところ讀者から冊子として刊行されたいと御希望もありましたので、雨露會の幹部の方に相談して二三増補して、同會で刊行したので、何しろ紀元前二千年にもなる支那上代の事で、用語等も現代の人には解し難いので出来る丈、平易に現代語に書き改めました。が至らぬところは推讀を願ひます引用の書目は煩はしいので一々挙げてありません。

昭和十年十月

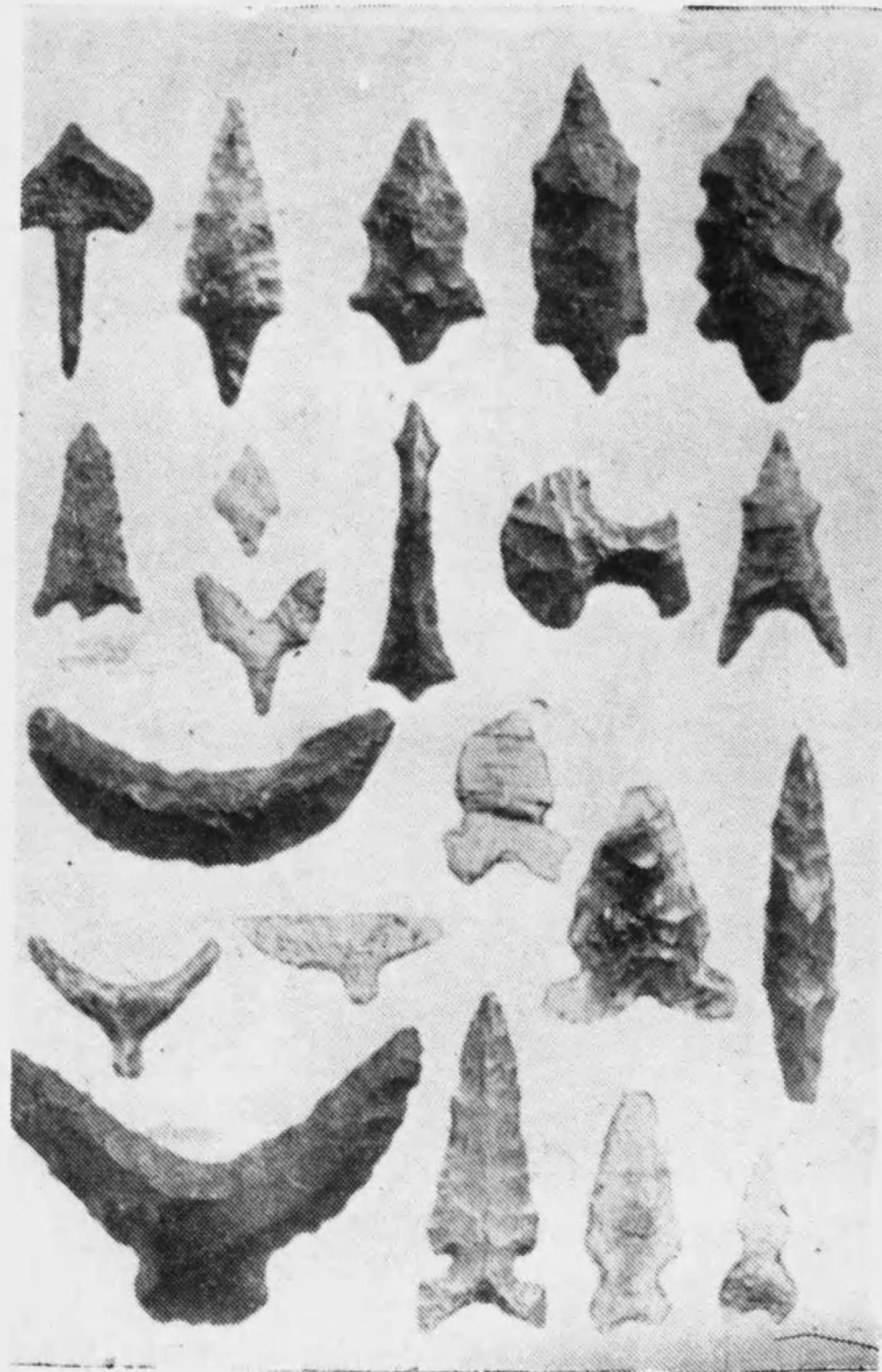
竹亭主人



圖州九貢禹



(圖地的那支古上) 圖州九貢禹



石器時代の遺物

(等匙石、錐石、鐵石)藏所室古考山本・館物博業農寺濱



西王母

(載所傳仙列) 母 王 西

古代支那鐵物語

日本工業新聞主幹福良竹亭——講演

今御紹介を受けました福良でございます、斯ういふお集りの會では何か新しいことを申上げるのが相應はしい譯であります、古い支那の鐵の物語りなどはこれこそ本當に古鐵のことでさだめしお聞きつらいこと、思ひます處で私がこれを思ひ立ちましたのは本年一月でした、世界絹物語といふものを私の社で發行してをります日本染織新聞に約六回に亘つて掲げましたそれを京都の蠶糸高等學校からは非自分の方で出してゐる同窓會の雜誌に載せたいと承諾を求めて参りましたので私も喜んで應諾しました、處が引續いて東京の蠶糸新報から矢張り世界の絹物語を載せたいといつて又申して参りましたそれからまた私が鐘紡の山科の工場に居られる明石染人先生に切抜を送つて批評を求めましたところこれは非常に有益な記事であるから自分の關係してゐる専門雜誌に紹介するといふことを申して参りました、私思ひましたのに苟も

蠶糸のことを研究し又染織等を研究されてゐる方ならばこの蠶糸が如何にして東洋から西洋へ渡つたかといふやうな歴史はもう既に研究されてゐるものと思つて居つた所がいつくんど圖らん私のやうな素人の書いたものを専門の蠶糸新報や京都衣笠の蠶糸學校の雜誌に轉載を求めて來るといふやうなことを見ますといふと案外斯うした方面は當業者に閑却されて居つたのではなからうか斯う考へたので私のお話致します支那古代の鐵のことも或は皆さんは古いことには未だお氣付になつてゐないことがありはしないかと思ひまして世界絹物語を書きましたやうな考へで茲でお話したいと思ふのであります。

鐵の發見と利用

大體の筋は御手許へ御渡しました印刷物に書いてありますが何分漢文で難しい文字で辭書を引かなければ分らないやうな字が澤山ありますが暫らくお話致します。

この鐵の發見並にその利用といふものが人類のこの社會に非常なる革新を齎したことは申すまでもないことであり、學者は先づ人類の進化の過程を三つに分けてをります、即ち石器時代―所謂石器を使った時代―その次が青銅時代―即ち銅青銅を使った時代―その次が鐵器時代で鐵の時代であります、吾々はこの鐵の時代に生活してゐるのであります、これが將來どうなるかは豫想する限りではありませんが試みに申しますと考古學者は石器時代を舊石器時代と新石器時代とに分けてゐますが、若し考古學者が遠慮悠久なる眼を以て人親進化の跡を觀る如くにこの鐵の時代を考察しましたならば十八世紀に石炭、蒸氣、電氣等の機械文明の起りましたのを劃期としてその以前を舊鐵器時代その後を新鐵器時代に分けることが出来ると思ひます、そして新鐵器時代は十八世紀産業革命以來に起つたのですから僅に二世紀を経るか經ぬかに過ぎない、申せば現代に漸く新鐵器時代の階段に上つたところであると見れば見られるのであります、こう考へて見ますと將來の鐵の世界はこれより益々發展するものと思はれます。

金屬の研究は近來餘程進歩しましたので將來この鐵よ

りももつと有力なものが現はれて来るか、これは豫想されませんが、しかしアルミニウムの釜鍋が出来たからとて鐵に代つてアルミニウムの時代が来るなどと云ふのはあまりに近眼の見方と言はねばなりません、過去の事を考へますと石器時代といふものは何萬年と續いたもので青銅時代は石器時代に比し僅なものであります、その僅と云つても支那邊りでは少くも二三千年以上續き又日本では青銅時代は非常に短く、その後へ直ぐ鐵の時代が参つたのであります、私はこの鐵の時代といふものは前にも申しました通りこれからは長く續き得られるであらうと考へてゐるのであります。

須味山と鐵圍山

諸世界で古くから文化の進んで居つた國はどういふ國々であるかといふと所謂紀元前に於きまして文化の進んだ國は印度、アッシリヤ、支那先づこの三地方が古い時代に於いて最も開けた文明國であつたのであり、この中で印度人は古くから鐵を知つてゐたやうに思ふのであります、印度人の宇宙觀は皆さんも御承知の如く宇宙といふものは須味山といふ大きな高い山があつてその周圍を大

古文獻の「鐵」の字

支那に於て「鐵」といふ字が文獻に現はれましたのは書經の禹貢にあるのが初見であります、それは紀元前二千年になります、また支那で鐵の武器を用ひたのは何年頃かと申しますと彼の文明批評家として有名なイギリス人ジー・エツチ・ウエルスといふ人が書いたものを見ますと鐵の武器が初めて支那で用ひられた時代は判らないが、しかし、恐らくはアッシリヤ等に用ひられたよりもズツと後で紀元前五百年頃(支那春秋戰國時代)であらう、それより三百年も前にアッシリヤ、埃及、ヨーロッパでは鐵の武器が使用されてゐた支那の鐵は大方西北方の匈奴から傳はつたものであらうと言つてゐます、しかしこれはウエルスが支那の古典を充分に調べなかつたから

海が取巻いてゐる、その大海の潮が流れないためにその又周圍を鐵圍山といふ鐵の山を以て圍まれてゐると申してゐる、これはお釋迦様の經文にもありますが、お釋迦様が未だ出ない時代から印度人はさういふやうなことを考へて居つたのでお釋迦様はそれを受けついで説かれたに過ぎない、斯ういふことは今日の天體説等から考へるといふと如何にも妄證のやうにも思はれるけれども須味山研究に關する書籍といふものは少くないのであります。

明治初年におきまして日本にも佐田介石といふ人が須味山説を引揚げて立ち西洋の天體説、所謂地球は太陽に從つて廻つてゐるといふ説は間違つてゐる須味山説によつて太陽が動くのであると斯ういふ説を唱へた、これは僅に五六十年前の事で須味山説といふものがまだく、人の頭に染込んでゐるといふことが判るのであります、更に又現代の如き何でも古いものを見直すといふ世の中に於きましては須味山の説なども又新しく學者が見直して之に對して新しい解説を加へて来るだらうと思ひます、私の未熟の考へを申しますと泰西の科學者はわが地球の表を包んでゐる岩圍の下にある重い鐵核を重圍と呼んでゐます、この重圍は主に鐵とニッケルから成ると云つて

で支那の鐵は匈奴から輸入したものでなく支那自身に産したものであります、だが、ウエルスの匈奴説も全然根據がないのでありません、それをお話するには「穆天子」傳のことを申さねばなりません。

周の穆王と鐵山

周の穆王の事を書いた古書で穆王は紀元前一千年頃周の國王となつたのですが此王は當時周の國の西北方に蟠居して屢々周の本土へ來寇して來る匈奴族を征伐しました、さうして造父と云ふ天下第一の御者に八駿の馬を御せしめ馬車に乗つて天下を周遊してその風土人情を視察されました、穆王は到る處でいろいろ珍奇な産物を見ました崑崙山に上り西王母といふ仙女に會つて瑤池に遊んだといふやうな神怪不思議の事など書いてありますので昔の儒者は一種の奇書として見ておりました、然るに輓近に及んで地理學者がこの書を見直しますとこの書は夫の山海經と共に支那古代の地誌として貴重なものであることを見出したのです、それは京大の小川琢治博士が二十年の研究に成つた支那歴史地理の書に詳しく記されてあります、其の穆天子傳に穆王が西征して奇閭氏の國へ參

り六師(軍團)と鐵山の下で會食をしました、鐵山に上り、山の神を祀りその祭器を撤して奇閭の人に與へた記事が載つてゐます小川博士の考證に依りますと奇閭氏の鐵山の位置は甘肅省の肅州の西嘉谿關(萬里長城の西の起點)の北側の黒山の邊と見てゐられます、こゝは周の世には塞外の地で夷狄即ち匈奴族が住んでゐたのです、小川博士は「穆王がこの山を祭つたのは五金の一(鐵)を産する處であるから鐵器を得た事はなくとも冶金がこの地方に古くから既に行はれてゐたものと想はる」と言つてゐられます、斯く考へて來るとウエルスの説も全く根據のないものではありません。

黃帝時代の金

諸支那の鐵は前に申したやうに禹の時代に梁州(四川省)から貢進したのですが、その以前に於きましては「金」といふ文字が現はれて居ります、この金といふのは凡ての金屬を總稱した言葉であつてその中に鐵も含まれてゐたのです、けれどもそれが鐵であるといふことを知らなかつたのだらうと思ふ、この「金」といふ文字が現はれて參りましたのは禹よりも古く即ち紀元前三千年位

の頃で支那の黃帝の時代、この黃帝は支那を統一しまして中國の國土の經營せられた方で支那の歴史はこの黃帝より始まりそれ以前は神話の歴史であります、この黃帝の時に「金」といふ文字が現はれてゐるのです、支那の古典には黃帝の徳を頌してその帝徳が草木蟲魚禽獸にまで及んだことを讚美し更にまた「勞_二羅日月星辰土石金玉_一す」とあつて生物のみならず無機物にまで普及したことを現はしてゐるのです。

尙ほその註に「山出_二珍寶_一」「山不_二藏_一珍」といふやうな言葉を用ひて説明してゐます「山出_二珍寶_一」は説明を要しませんが「山不_二藏_一珍」とは黃帝の徳が光被して山々はその寶を隠して置くことが出来なくなつたことを言ふのです、即ち言葉を換へて言へば鐵物類が——黃帝の時代に發掘發見されたと申すのです——それより以前にも或はそれらのものが探掘され發見されたかも知れませんが、黃帝の時代になりました盛んにさういふことを美しい言葉で表現したものであらうと思ふ。

黃帝と蚩尤の戰

黃帝の徳に天地萬物に及びましたけれど、釋迦に提婆

といふ如くに黃帝の徳に服せず頑固に抵抗しました蚩尤(しのう)といふ悍悍なものがゐました、之は臺灣の生蠻等に何々族といつてゐるやうなもので一つの蚩尤族といふ蠻族でありますこれが黃帝の命令に服せないので已むを得ず武力で制しやうとしても容易に屈服しないのですそれは非常に強いものでどういふ者であつたかといふことを古文獻によつて見ますといふと、この蠻族は八十一人の兄弟を持つてゐた、この兄弟といふのは部族だと思ひますが、それらの人間は獸類のやうな身體をして居つて人の言葉を話し頭を銅鐵の如しと書いてあります、然し獸の身體をして人言を話すといふことは恐らくないこととせうその當時は蚩尤族は支那北部に居りましたので寒い時に毛皮を着て居つた初めてそれを見た者は獸のやうに見えたのだらうと思ひます、それで獸身人語といふ言葉が出来又既にその時代に銅や鐵が知られて居たので銅鐵の額と書いたものであらうと思ひます、この蚩尤と黃帝の戰ひは半ば神祕的でありましてそれが又非常に面白いのであります。

それはどういふことであるかと申すと餘談に亘りますが、黃帝が應龍といふ龍を使つて蚩尤を攻めさせました

ところ蚩尤は風伯雨師に請ふて暴風雨を起させました、この風伯雨師は以前には新聞等にも暴風雨の時に能く見える字ですが近頃はあまり用ひません、即ち風の神と雨の神です、雨の神と風の神が大風雨を降つたのですからさすがの黄帝の軍も進む事が出来なかつたのです、その時黄帝は天女の「魃」に頼みましてその雨を止めて貰つたがこの魃といふ字は旱魃の魃でこれも新聞等にはよく見えてをります、この蚩尤が雨を降らした時に黄帝がそれを止めるために頼んだ天女の名前が魃といふので日照りが長く続くと言つて魃々々といふのであります、ソコで今度は蚩尤が大霧を起したので方角が分からなくなりました黄帝は霧中に目的地を誤らない様に指南車を造つて兵を進め遂に蚩尤を捕虜にして殺しました、この黄帝と蚩尤との決戦は涿鹿といふ平野で行はれたのです涿鹿は今の河北省の涿州です、ソコに蚩尤の塚があつて支那に兵亂が起る時にはその塚から赤い氣が立上る、これを蚩尤の旗といつて支那人は戰亂の兆として恐れてゐます、支那では蚩尤を軍神として祀り齊の國(山東省)では八神の一つに加へられてゐた、それが日本へ渡つて兵主神社として祭られてゐると申されてゐます。

と云ひます、矛(ほこ)は柄の長さ周尺で二丈のものを曾矛、二丈四尺のものを夷矛と申します蚩尤はまた大弩をも造つたと書いてあります。

蚩尤はこうした武器を造つて黄帝と戦つた、又黄帝もこれに對して武器を造つてゐただらうと思ひます、蚩尤が武器を造つてゐるのに黄帝が木や竹や石を以てこの蚩尤と戦ふといふことは、これは今日エチオピアが如何に内彈戰で以てイタリと戰爭するといつてゐるがさういふ事は出来ない、矢張りエチオピアも精銳なる武器を輸入して戦ふことになると思ひます、蚩尤が武器を造る如く黄帝も武器を造つた、然らば何が故に黄帝が武器を造つたといふことがかいてないかといふとこれは黄帝は支那の王道政治の模範であつて、支那人は神様とまで崇めてゐる、その神様が人を征伐するために武器を造るといふことは帝王の徳を損ふとも考へたのか黄帝が武器を造つたといふやうなことは書いてありません、然らばこの武器は銅で造つたのか鐵で造つたのか、更に研究を進めて見ませう。

武器は銅か鐵か

支那の造兵の開祖

以上黄帝と蚩尤との戦ひは最初のことわり申してある通り餘談でありまして、之より本題に立戻つて蚩尤が武器を造つたことのお話いたします、支那の古文獻に武器を造つたことを考へますと、蚩尤族には蠻勇ばかりでなく、兵器を造る技術を有してゐたものがあつたと見えねばなりません、何しろ紀元前三千年頃の事ですから精しいことは分りませんが、蚩尤が初めて兵器を造つた事は管子といふ本に「受_二廬山之金_一作_二五兵_一」とあるのが初見のやうです、即ち蚩尤が廬山といふ所の金を掘出して五つの兵器を造つたのであります、この五つの兵器は如何なるものであるかといふと『_二戈(ジュ)戈(クワ)戟(ゲキ)曾矛(シヌボウ)夷矛(イボウ)_一』と斯ういふ風になつてゐるのです、戈といふのは周尺で長さ一丈二尺ある無刃のつゝほこであつて専ら人を殴りつける爲に用ひたものです、戈(ほこ)は枝の傍出してゐる兩刃の劍を長い柄の先につけたもので單枝のものを戈と云ひ双枝のものを戟

この武器は銅で造つたかそれとも鐵で造つたか黄帝の時代は青銅の初期であるからそれらの武器は未だ鐵を以て造る所まで進んでゐなかつたと思ひます、矢張り銅の鉞、銅の劍といふやうなもので銅で造つたものである、それは日本にも銅の劍、銅の鉞、銅の鉞といふものが北九州邊りから中國、四國、近畿地方にでも僅ではありますが出土してをります、それでさういふ時代の武器は恐らく殆んどが銅であつたと思はれます、それに又黄帝は治世の終りに首山の銅を探つて鼎を荆山の下に鑄ましました鼎が出来上つた時に龍が昇を垂て下つて黄帝を迎へ、黄帝は龍に乗つて昇天しました、その記事は列仙傳に見えてゐます、これに據つても黄帝の時代は青銅の時代であつたこと、想はれます。

少し話が廻りますが全體支那人に限らず一般人類といふものがこの鐵を鐵とは知らないけれども兎に角鐵鑛を用ひたといふことはいつ頃からであつたらうか、一つ考へて見ませう、人間が鐵を知り鐵を鐵として用ひたのは鐵の時代からであるが、鐵を鐵と知らずして用ひたのはそれよりもズツト古い時代でありまして、石器時代まで遡ることが出来ます、それが火の起原と交渉を有するこ

とに於て大なる興味を感ずるのです。

燧石と黄鐵鑛

この時代の人間は鐵といふものを知らなかつたが石の鑛など造るため堅い燧石で燧石を缺いてゐたところ隅々それから火花が出たのです、この堅い燧石は何んであるかといふと即ち黄鐵鑛でした、彼等は初めは喫驚したろうが後には燧石と黄鐵鑛の断片とをから合はして火を取ることを考へました、さうして人間の火食即ち物を煮て食ふとはこれから始まつたのです、それに又自然林に於きまして樹木と樹木と擦れ合つて火災が起ることがあるので、木と木と擦れ合はすと火が出るのを見て極く簡単な揉錐式の發火具を考へ出したのです、伊勢の宇治山田の徴古館には槍で造つた揉錐式の發火具があります。

人間が燧石を用ひた時代は何時頃かと申すとヨーロッパでは第三氷河期の時代に住んでゐた原人「我我」とは骨格を異にして人間やら獸類やら判らぬやうな人類は既に燧石を用ひて火を取ることを知つてゐたのでその原人の使用した燧石と黄鐵の鑛石が凝塊となつてゐるものが第三期氷河の遺蹟から發見されてゐる、さうしてこの燧

石と黄鐵の鑛石はマンモスの遺骸の附近に於て發見せられるのでマンモスの棲息してゐた舊石器時代の人間がこれを使用したことが證明せられる、この原人は彼等の使用した燧石、その他原始的の石器を遺して此世界から絶滅しました、さうして近代に至り彼等の遺骨がヨーロッパで發見される迄は燧石や原始的の石器が彼等が數萬年かの昔時に此地上に棲息してゐたのを語る唯一の證據であつたのです、こう考へて來ると燧石の一片ですら人間の歴史「人類の進化史」に於て大切なことを知らねばなりません。

燧人氏の時代

この原人の後へ現はれて來たのが我々と骨格を同うしてゐる人間であつてこれが新石器時代の始まりであります、この石器時代がいつ頃から始まつてゐるか云ふことは明言は出来ませぬがヨーロッパでは紀元前五六千年乃至一萬年位と推定されてゐます、舊石器時代はそれよりもズツ古いのでその時代に用ひられた燧石が日本では七八十年前マツチが輸入される迄専ら用ひられてゐたのです、我等の家庭では火打箱を備へ旅行には火打袋を

携帶しましたマツチが遍く用ひられるやうになつても佛の燈明などは燧できつた火を用ひました、もし燧石を通して人間の歴史を研究して見たならば實に興味津々として盡きないものがあるでせう、しかしそれは後日に譲りまして支那で燧を切つて火を取ることを始めたのは何時頃であるかと調べて見ますと明に支那の古文獻に載つてゐます、それは燧人氏の時代であります。

ところで支那の燧人氏の時代に燧を切つて火食を教へたと古い書に書いてありますが、燧を切つてその火で物を煮て食ふ事を教へたのであります、支那では燧人氏の前に有巢氏といふのが出てゐます有巢氏の時代は人間が洪水や猛獸の害を免れるため高い木の上に巢を營んで棲息してゐたものと想はれます、次に燧人氏の時代になり燧を切つて火を取るやうになつてからは猛獸は火で防ぐ事が出来なから生活の危険がやゝ減ぜられて參つたと思はれます、有巢氏と申しても有巢といふ人がゐたのではなく人間が木の上で巢を營んで棲息してゐた時代で燧人氏といふのも人間が燧を切つて火を取ることを知つた時代、すなはち燧石時代をいつたのであります。

支那にも氷河

それを西洋の學者はその時代に棲息してゐた原人の遺しました燧石等に依つて第三氷河の時代に充てゝゐますが、支那の氷河時代はヨーロッパの如くに研究されてゐないので燧石時代はいつ頃から始まつたかを明に申上けることが出来ません、だが支那にも氷河のあつたとはアメリカの探検團が支那の西北方で發見いたしました、また原人は現在の漢人とは全く骨格を異にしてゐますので考古學者や人類學者の興味を呼び起しました、この原人の遺骨がヨーロッパで發見された舊石器時代の原人の遺骨と同じものであつたならば東西人類分布の上に更に新しい問題を提議することになるのです。

日月山の氷河探検

わが日本人で支那の氷河を探検して紹介したのは大旅行家小越平陸氏が嚆矢であります、小越氏は支那にあること三十年、北は滿蒙甘肅、青海を極め南は廣東福建に及び、東山東南湘江より西は四川雲南貴明に至りての踏破せる行程は二十萬支里と稱せられてゐます、氏が大

正十一年黄河の源流を極め青海甘肅の境界黄河の一曲のところに聳えた日月山といふ最高一萬五千尺、終年結氷してゐる高山を探検しましたが、この山中に日本の白山の御花畑のやうに各種の珍しい花が咲いてゐました、この中で寒牡丹は最も珍しいのです、ソコを二百尺下ると盆地があつてこれは大古の氷河で更に小丘陵を隔てて大なる盆地があつて、やはり大古の氷河であると小越氏は旅行記に書いてあります、この日月山を崑崙山に擬することがあるけれどこれは當然と申してゐます。

日本には舊石器時代はなく新石器時代から始まつてゐますが支那では舊石器時代の遺物(打製の原始的石器)が見されてゐます、もしその中に西洋で発見されたやうな燧石と黄鐵の鑛石との凝塊が発見されてゐたならば上古の支那の鐵を研究するに参考資料となりますが、支那ではまだソコまで研究の行届いてゐないのは遺憾であります日本で最古の火打鐵は東京上野の帝室博物館にあつてこの模造品は濱寺の農業博物館の本山考古室農工器具の中に收められてあります。

五金生成の過程

るところがあります。

土から金に

淮南子(紀元前百八十九年頃漢の淮南王の時編纂されたもの)の教えるところでは黄金、赤金、白金、玄金は各その金屬を生ぜしめるエネルギーを有する土からいろいろの段階を経てその金屬に化生するので五金に配してその七を五つに分けてこれを五土と申します、すなはち正土と云ふ土から黄金が出来るし偏土と云ふ土から青金が出来ると、壯土といふ土から赤金が、弱土といふ土から白金が壯土と云ふ土から鐵が出ると書いてあります、土と云ふものがいろいろの過程を経てそれから鑛物に變化しまして或は黄金になり青金になり赤金になり白金になり玄金になると云ふ風に説いてゐるのであります、それがどう云ふ風に變化するかその過程を申し上げますと大變長くなりますから略して置きます、兎に角、こう云ふ正土から黄金になりますその處から黄いろい雲が現はれる、かうした雲は各その金屬の色を現はして青金は青い雲になり赤金は赤い雲白金は白い雲になり黒い雲といふのが所謂鐵であります、さやうに五土の氣が變化して

それから上古の支那で金屬の種類をどういふ風に分類したかといふと五金に分類されてありまして色に依つてその名を付けてあります、それを申しますと(一)黄金、所謂今日の金(二)青金これは「ろくせう」である(三)辭書に書いてあります、もう少し私はこれを研究して見たいと思ひますが、支那では「ろくせう」と云ふものは「ろくせう」だけでそのまま結晶したものが出てゐると見えます、それから(三)赤金(銅)(四)白金(銀)(五)玄金これは鐵であります、斯様に昔の支那の金屬は五金に分けてあります、日本では黄金をこがね、赤金(銅)をあかがね、白金を(銀)しろがね、玄金(鐵)をくろがねと色に依つて分けてあります、すが青金の「ろくせう」は「ろくせう」と呼んで青金(あをがね)とは言はないやうに心得てゐます、支那ではこの五金の別といふものは紀元前二千年頃に既に古書に掲げられてあつて随分古いものです、尙ほ前漢の時代に編纂されました淮南子といふ本を見ますと此等の五金の生成せられを順序等を書いてあります、支那の學者はこれを化生と申してゐます、その順序階段を示すため普通の漢和字典などにはない文字を用ひてあります、要するに物質不滅と萬物一源説であつて現代の化學と一致してゐ

雲となり陰陽が相せまつて雷電を起す雲が電氣作用で雷電を起すのです、それが雨になります、さうして赤い水は赤海へ黒い水は玄海へ黄いろい水は黄海へ白い水は白海へ注ぐといふ風に説いてあります、之は陰陽五行説から出てゐるのであつて陰陽五行は土を主としてゐるので、それを詳しく申すと長くなりますので悉くは申しません

物質不滅説と合致

諸此等の説を味ふて見ますと物質不滅説と合致してゐるを發見いたします、泰西の學者の説いてゐる物質不滅法は支那では二千年も前にチャンと書物に書いてゐるのであります、尙ほ簡單に皆サンにお解りになるやうに五土の變化を總評したものを申上げて見ませうそれはかういふのです、

五土の氣(エネルギー)上つて天に御す(宇宙に充滿す)而して陰陽相搏つて雷電と爲る則ち復た下つて而して海に合す、此五行之精(元素)、化生既に極つて而して其宅に歸藏す(還元することを云ふ)

また生物の進化を評してかう申してゐます

羽毛鱗介之類、俱に無情に由つて而して有情に之く相代(こもこも)謝して而して盛なり

甚だ簡単であるが前者は物質の不滅、後者は生物の進化を言ひ現はしてゐます、また金屬の變化することを説いてゐるのは近來の新物質觀即ち元素の變化と相似たところがあります。

今日の新しい學說では凡ての物質といふものは電子から成り立つてゐる、その電子の排列組立によつて金となり銀となり銅となるので鉛もまた金に變化するといふ事を學者が唱へてゐます、一つの元素が他の元素に變化するといふとはむかしの化學者は信じなかつた、然るに二十世紀に至りラヂウムの發見に依り放射性の研究が段々盛んになり物質觀が一變して元素の變化を認めるやうになりました、すなはち「放射性の元素は内發的の變化に依つて他の元素に變りつゝある、そしてこの過程は多少不安定ないくつもの中間元素を経て最後の安定なものに達する」と學者は申してゐます、假令ば我々が今鉛と見てゐるのはその金屬が鉛の状態に置かれてゐるのを見てゐるのでその鉛の元素といふものは變化して或る過程を経て他の金屬に化生するのであります、支那の古書にはさう明白に記述してはありませんが、かうした暗示を與へてゐます。

鉛から金

今淮南子に書いてあります金屬の化生の階段を見ますとどの金屬も一應は必ず水銀の状態に置かれてあります、その水銀の状態に置かれるのは金屬によりまして或は五百年或八百、千年といふ様な年月を経てそれが化生して黄金になり青金になり玄金になるのであります、如何なる礦物も水銀の時代を経過しない事はないのです、ソコで支那の鍊金を術者は水銀を利用して鉛を金に變ぜしめると云ふやうなことを考へ付いたので、即ち鍊金術者は水銀を手品の種に使用したので水銀に或る礦物を加へてこれを鍊ると金になるといふことを考へてこれを實驗したので、支那ばかりではなく西洋にも鍊金術者といふものがあつたので此鍊金術が今日の化學の起原となつたのは皆サン御承知の事と存じます、これは二千年も前の談ですけれどツイ近い頃十年ほど前に埼玉縣に羽鳥といふ人が現はれて還金術といふことを唱へました、が原理は一つであります、すなはち新しい原子説から金の環元といふ事を考へて來たのであらうと思ひます、それはだぶん新聞にも出ましたが結局山師といふ事になつたのであります。

山相の實地研究

次にこの地下に埋没されてゐる所の金屬を如何にして察知するかと申しますとその方法は種々ありますが今日に於ても晴天の朝早く起出で山相を望んでゐると金のある所には黄色い氣或は銅のある所には赤い氣、黒い氣は鐵と注意して見ればそれは判るとのことであり、これは誠に嘘のやうなことであります、その一人に私は東京山相を研究してゐる者があります、その一人に私は東京で會ひましたがこの人は山陰の生れで「もぐら」の板垣と評せられるほど地下の礦物等を見出す一種の妙を得てゐました、この人は臺灣で石油礦を發見し越後の方でも矢張り石油礦を發見してをり又東京では洲崎の大八幡の庭にガスが出るといふので地下を掘つて見た處、果してガスが噴出して大八幡では此ガスを燈火から炊事に用ひておました、今も出てゐるかどうかは知りませんが、又板垣君は山に生えてゐる樹木の色を見て夫に依つて此地下に埋没する金屬を發見することが出来る、金のある所と銅のある所では山に生えてゐる樹木の色が異つてゐるので木の葉を見てそれが判るといふことを申してをりました

さうして群馬縣の或る所の山を見てこの山から必ず金が出る、それはどういふ譯かといふとその木の葉が金が出たから他の木の葉の色と違つてゐる、といふので段々研究致しましてその山から眞に少量でありますけれども金の小粒が出て參つたのであります、尤もこれは工業としてその金を取出すといふことは費用がかかり却つて損失であるから遂に採掘されずに終つたのであります、なほこの人は今お話したやうに山相を見てそこから如何なる礦物が出るかといふことを知る明を有つてゐたので日露戦争の時日本に鐵がなくて困つた、その時に北海道の渡島に優良な鐵が埋藏されてゐるといつて廣大なる地域にわたり試掘願を當局へ出したのであります、ところが多額の金を納めないとその權利を得られないのであります、この板垣君の試掘は資金難のため遂に中止となりました、今日現在生きてゐる人がさういふことをやるのであります、況や二千年前にさういふやうなことが盛んに行はれてゐる時代にはこれは疑ふ譯のものではなからうと思ふのであります、又この地下に埋藏する金屬を見出す一方法と致しまして管子といふ書物に書いてあります

地下の金屬を見出す法

この管子といふ本は如何なる本かと申しますと齊の國の宰相になつた管仲といふ人の言つたことを書いた本です、齊の國には鐵礦等を産しましたので管仲は製鐵及製鹽の事業を起しまして齊の國を非常に強くしました、當時支那は十二の國に分割されてをたのであります、その内の齊は管仲が宰相となりましてその國を強大ならしめそして今日國際聯盟に於てイギリスが勢力を占めてゐる如く齊の國が他の十一國を率いて一番偉い勢力を持つて覇を占めたのであります、斯ういふ偉い人が言つたことを書いてあるのですから恐らくこれも嘘ではなからうと思ひます、その管子に出てゐます地下の金屬を見分けます法には山に赭土赤い土があればその下に鐵がある、山の上に鉛があるとその下に銀があり、山の上に銀があればその下に丹がある、又山の上に磁石があるとその下には金があると書いてある、赭土は山の上にあつて直ぐ知れませと鉛とか、銀とか、磁石とかいふものは山の上に露出してゐるか、或は地下を掘つて見たのか詳しく書いてないのですから確とした事が分らないにし

ても斯ういふことは管子が實驗したことを書いたのでせうからこれは決して妄誕なものではなからうかと私は著書に依つて信用いたしてゐるのであります。

銅鐵を喰ふ猿

あまり堅いことをお話したので息抜きに、鐵に關する挿話を申します、鐵を空氣中に曝らして置くと赤い錆が付きます、これは空氣中の酸素が鐵に觸れ酸にして酸化鐵となるのであります、酸に共に、空氣中に飛散してゐます鐵を好む微菌もまたその酸化を助けるのであります、猫に小判と云ひますが猫に取つては小判よりも輕節を喜ぶやうに鐵を喰ふ微菌は鐵を唯一の好物としてゐるのであります、偕また生物の中で鐵を嗜むものがあるかと調べて見ますと銅鐵を喰ふ猿といふ動物があります、その動物の生態が山海經といふ上古の地誌に載つてゐます、同より想像のものですけれど、南方の山谷に一つの動物が棲んでゐる、それを猿と云ふ、此動物は象の鼻で犀の目、牛の尾で虎の足をしてゐる、人がその皮を敷いて寝ると暑氣を避けることが出来る、その形を圖に描いて置くと邪氣を掃ふことが出来る、この猿は銅鐵を嗜ん

で他のものは一切喰はないと書いてあります、私が此の記事に眼を注いだのは猿が銅鐵を喰ふといふことです、猿が南方に棲んでゐたのですから大古南方に銅鐵を産してゐたことが分ります、支那で南方といふと雲南とか福建とかモット南へ進んで安南交趾等であつて此等の地方に銅鐵を産してゐたことを知ることが出来ま、日本では正月の二日にこの猿の畫を枕の下に敷いて寝る風習がありますが、これは猿の圖を書いて置くくと邪氣を掃ふといふ、山海經の傳説から來たものと思はれる

干將莫邪の劍

それから面白いのは干將莫邪の劍の由來であります、干將と莫邪は夫婦で吳の國の刀匠の名人でありました、吳が越に亡はされて越の王が干將を召して刀劍を鍛はせたのです、越の國には良質の鐵を産しますところ、干將の女房の莫邪は熱つ性であつたと更に鐵の柱を抱いて六月土用の熱い日照りに身體を冷やしてゐました、ところで莫邪が懐胎して子を生み落としますと、それは鐵丸でした、この鐵丸を材料として干將が鍛ふたのが莫邪の劍であるといふと傳へられてゐる、干將は陽劍莫邪は陰劍であつて

輕呂の劍

その名は日本まで傳はつてゐます、支那で初めて劍を造つたのは矢張り蚩尤でありまして管子に「昔葛天盧之山發して金を出す蚩尤受けて而してこれを制して以て劍鏹となる此劍の始まりなり」と出てゐます盧之山發して金を出すといふは盧山といふ山を發掘して金を採取したといふ意味です、この劍は銅劍であらうと思ひます、また吳の國には干將莫邪の他「屬鏹」といふ名劍があります。

尙ほ劍の事をお話しますと、前に申しました周の穆王が參りました奇聞氏の鐵山は良質の鐵を産してその鐵で鍛へた劍を輕呂(けいろ)又は徑呂(けいろ)と申しました後には良劍を輕呂といふのは支那語でなく匈奴の言葉でないかと思ひます。また周の武王が殷の紂王を滅しましたその龍姬姐已を斬つたのは輕呂の劍であると傳へられてゐます、淨瑠璃の玉藻前二段目にそれが仕組れてあります、今春淡路の洲本で郷土藝術淡路人形淨瑠璃が演ぜられました時私は見て參りました、それから後の世に鏹鐵といふものが西蕃から出てゐます西蕃といふのは支那の西方を總稱したもので中央アジアの邊までも呼んでゐ

ますので甚だ漠然としてゐますがその地方から錯鐵といふ良鐵が出てゐたことを夷門廣積といふ本に出てゐるのを山川早水先生から示されました、それはこうなので「錯鐵西蕃に出づ、面上旋螺花あり芝藤雪花あり（鐵の光華を云ふ）凡そ刀劍器皿を造る、打磨光淨、金絲罽を用ひて之を澤す（磨くこと）其花則ち見ゆ價值銀に過ぐ」とあります、餘程良質の鐵と見えその價值は銀よりも高かつたといふのです、こうした良質の鐵が西蕃から輸入されたものと見えます。

禹貢に現はれた鐵

お話が後や先になります「鐵」といふ字が初めて支那の古文獻に現はれました禹の時代の事を申し上げますとこの禹の時代に支那に非常の洪水がありまして禹は舜の命を受けてこれを治め揚子江及び黄河の源流を窮めその足跡は支那全土に及び十三年の歳月を費してその工を全うしました、禹は古今稀なる治水家でもまた偉大なる政治家でもありました、それでその洪水を治めました功績によつて舜から位を譲られて帝王となり「夏」の世を創りま

して當時梁州では璆が一番多く産出したし、次に鐵、次に銀、次に鏤即ち銅鐵であつたらうと申してゐます、また鐵は銀よりも上位にあるのは鐵が銀よりも重寶視されたのではなからうかと申して居ます。

青銅の時代

禹の時代は紀元前二千二百年の頃ですが、しかしまだ鐵の時代には達せず所謂青銅の時代でありました、禹の創めた夏の世から殷の世となりそれから周の世となるのですが、夏殷の世代には鑄銅が行はれて夏殷の世に既に鼎、尊、罍、等の銅器が鑄造されて殷の世となつてます、鑄銅の術が進みました殷の世は青銅時代の繁榮期でありました、その鑄造されました銅器は河南省の殷の廢墟から出土されてゐます、その出土品は大坂美術俱樂部の山中の陳列會などに出品されますので皆サンも御覽になつたこと、存じます、その彫刻なども古雅なものがあつたこと、また周の世に鑄造されましたろくろの銅器もまた出土品として出て參つてゐます、さて周の末世に至り王室が衰へて諸侯の權力が強大となり春秋戰國の時代となるのです。

した、「夏」の世は十四世四百年續いて殷に滅ぼされました、禹王の治めた國土は九州あつて其九州の諸侯から各地方の特産物等を禹王に貢進しました、其の國々の風土貢物等の記録を禹貢と申します、禹貢を見るところ當時支那各州に産した重なる物産を網羅してあります、此等の物産の中には今も尚ほその地方の特産となつてゐるものもあつたので禹貢は貴重なる記録となつてゐます、尚ほ黄河治水は支那歴代の悩みでありましてこれが爲め政變を起した事もあり現代の中華民國に於ても大問題となつてゐるのです。

禹土の治めました九州の地方に「梁」といふのがあつた、今の四川省です、この四川省から禹王に貢獻した特産物を禹貢に「梁州厥貢璆、銀、鏤」と掲げてあります、璆といふのは非常に硬い玉類で琅玕等を云つたのです、鏤は今の鐵ですが註に生鐵と出てをります、銀もやはり今のやうなもので、鏤といふのは今日で申します鐵鐵であります、即ち物を鏤刻するとの出来る剛い鐵を云のです、此等の鐵類が梁州、今の四川省から出たがここには鐵山があつたのでこゝにいふ鐵類を産したのであります、或學者は禹貢に載つてゐる鐵物の順序を研究しま

愈よ鐵の時代

支那の戰國時代は日本の戰國時代と同じことで群雄相並び起つて各々平霸戦を演じました、此時代に至つて鐵鐵が起りました、春秋の世は周の平王が都を洛邑に遷した東周から始まるのですが、それは紀元前七百七十年頃でそれから戰國時代となり秦の始皇帝が出て六國を滅ぼして天下を統一しました、それは紀元前二百廿年頃です、その春秋戰國時代に製鐵が起つたのであつて今關天彭氏の「支那商工業の變遷」には「春秋戰國時代に製鐵大に起る」と記してあります、この大の字は注意せねばならぬ文字でそれより前にも製鐵の事業はボツ／＼開けてゐたけれど春秋戰國時代に及んで盛大になつたことを言つたのであります、従つて支那の鐵時代は春秋戰國の時代より始まると言つてよいのです。

春秋戰國時代には武器が非常に進歩しました、造兵と製鐵とは大なる關係を有する事は皆サンも御承知の通りであります、今「支那商工業の變遷」に錄せられました其時代の有名な兵器を挙げますと鄭の刀、宋の斤（まさかり）魯の削（この削と云ふのは分りませぬが物を削る兵

器を言つたのではなからうかと思ふ）それから吳の劍であります、尙ほ古い本に書いてあります珍らしい兵器の中に、衝車といつてこれは装甲タンクの前身であらうと私は思ひます、それはどういふものかといふとそれは鐵で装はれた車で之を曳く馬も装甲してゐる、又その車に乗つてゐる兵士も鐵の甲などを着て武装してゐる、車も装甲、兵士も装甲、馬も装甲です、又車の轆には大きな鐵を施してあります、さうしてこれで敵の城を衝くといふのですから近代の戦闘に用ひられてゐるタンクの先驅と云ふべきものでありますまた雲梯と云つて敵の城に攀上る攻城機が造られてゐます、鐵材で造つた高い梯であります、支那ではこうした斬新なる武器が紀元前三千年頃に造られてゐるのです、年代から云ふと日本の神代に當ります。

攻防武器の進歩

尙ほ古い本に見えてゐます春秋戦國時代の武器を見ますと鐵劍、鐵戟、鐵杖、鐵椎等があつて鐵の武器が造られてゐます、鐵椎といふのは鐵の槌、門破りに用ひるやうな大きな槌で重さが四十斤もあつたといふ随分大きな

した奇怪なる舊式の武器を支那兵が持つてゐました。

製鐵事業の隆盛

又春秋戦國時代に製鐵事業の盛んに起りましたのは他にも原因があります、この時代には列國が競ふて軍備を充實し實力を以て覇を争ひました、軍備を充實するには國力を養成せねばならぬ、國力を養成するには資源を開發せねばならぬ、ソコで經世家の眼を注いだのは鹽と鐵です、鹽と鐵とは今も尙ほ中華民國の二大資源であるが如くに春秋戦國時代も同様であります、即ち鹽と鐵を産する處では盛んに製鹽製鐵の事業を起して國力の充實を圖りました、齊の國では管仲の計を用ひて製鹽と製鐵に力を注いでその國を強大にして列國の盟主となりましたまた自國で鐵や鹽を産せぬところは武力のあるものは武力で鹽、鐵を産する地方を侵略しました、また交通運輸の衝に當つてゐる都市では製鹽、製鐵を擧いで商業の利益を收めてその國を富ました。

春秋戦國時代に支那に幾許の銅鐵の山があつたかと云ふと管子に天下の名山が五千二百七十ありその中銅山が四百六十七、鐵を出す山が三千六百有九あるといふ事

ものが史書に見えてゐます、張良が秦の始皇帝の盧溥を博浪沙に待受けてその車に鐵椎を投げ付けたのは有名な話ですがこの鐵椎は餘ほど斤量のあつたものでないと始皇帝の車を破壊することは出来ないでせう、當時は今日の様に爆彈といふものがなかつたので鐵椎が爆彈の代用をしたのです、張良の邀撃は失敗に終つたのでその後張良は自ら血氣を誡め黄石公といふ仙人から兵法を授かり漢の高祖に仕へて其帷幄に參し天下の統一に貢獻しました、それからまた鐵器といふものが出来てゐる、鐵で造つた幕で楯を列べたやうなものです、既にこの時に鐵板が出来てゐるので、かやうに春秋戦國時代には攻防兩様の武器が進歩してゐたのです。

ところが遺憾ながらこれらの武器は秦の始皇帝が天下を統一した時支那全土にある武器を沒收して漢陽に巨大な金人を十二軀も鑄てモニュメントを造りまた巨鐘に鑄造しました、それがため今日まで残つてゐるのは後世に造られた武器であつて戦國時代に造られた斬新な武器は殆ど滅んでその名を傳ふるのみで實物を見ることは出来ないので、但しその後には造られた各種の武器の中にも形の奇怪なものがありまして、日清戦争の際にはこう

が書いてあります、管子は前に申し述べました通り當時管仲の學説を奉ずるものが作つた本ですから銅鐵の山の數も出鱈目ではなく相當の調査に基いたものであらうと思ふ、支那は随分大きな國でありますが管仲の時代（春秋の世）鐵山が三千六百九箇所もあつて銅よりも多く鐵を産したことが分ります、今日でも鐵山は殆ど支那全土にあつて多量の鐵を産してゐます。

製鐵と鐵成金

斯く製鐵事業の盛んに興ると共に製鐵を以て産を成した所謂鐵成金と稱するものも現はれて參りました、史記の貨殖傳は先秦時代より漢初に至る富豪傳であつてその中に錄せられたる富豪十三名の中製鐵及び製鹽で産を作つたものが半數以上を占めてゐるのである、又武器の製造家も今日の軍需工業者が利益を得る如くに利益を得て成金になつたものもあるだらうと思はれるけれどその名は逸して傳はつてゐない、唯刀工即ち刀鍛冶の名匠は日本で正宗の名が傳はつてゐる如くに傳はつてゐます、但し正宗が刀鍛冶で金持となつたといふ談も聞きません、支那の名匠もまた同様です。

然るに史記の貨殖傳の中に刀研ぎで大富豪となつた至氏の事が載つてゐます、文句が一寸六ヶしくつて註釋がないと解し兼ますが其文句を申すと『酒削薄技也而至氏鼎食』とあります、註を見ますと酒削は刀削を治する名であるとしてあります、即ち支那の或る地方では刀鍛冶を「酒削」と呼んでゐたと見えます、然しまた別の註を見ますと「削刀者を酒削と名づく刀を摩して水を以て之を酒ふをいふ」とあります、即ち刀研ぎの事です至氏は刀研ぎのやうな薄技で富を作り王侯の如くに鼎で祀られる身分となつたと云ふのであります、日本人は刀削を愛用して名工も多く出ましたけれどまだ刀研ぎで大富豪となつたもの聞きません、それは兎に角支那では鐵と鹽とが財源の二大宗となつてゐるのですから之等の事業に携はつてゐるものが産を起し富を作るのは當然の事であり

支那の二大富豪

支那で春秋戰國時代の大富豪と申すと陶朱と倚頓、この二人が一番の大金持であつて後世富豪を志す支那人は此二人を目標として勵んだのであります、恐らく今日も

銅鐵の類を集めて山の如く積上げ、なほ深い井戸を掘つて銅鐵を埋め、これを寶の井戸と呼んでゐた、また絶世の美人を閨房に溢るるばかり蓄へてゐたといふのです、その美人の中には有名な西施がゐた、范蠡は支那隨一の美人西施を携へ五湖といふ絶勝の湖水に舟を浮べて遊んでゐた、天下第一の美人を携へ天下第一の景色を有する五湖に遊んだのだからその風流は千古に傳へられて支那は勿論わが日本に於ても畫に描かれまた戯曲の中に取り入られて詩歌などにも吟詠されてゐます、この范蠡は後に越の國を辭して齊の國へ参りこゝでもまた大富豪となりそれから陶といふ國へ行つてまた富を作り朱公といふ名を以て尊ばれました、この人は十九年の間に三たび大富豪となつたが再び分散して貧乏な友達や疎遠な親類などに與へたといふことです、しかし私が皆サンにお話するのは范蠡の致富をいふのでなく彼の富が銅鐵に負ふことの少くないのを申すのであります、倚頓は製鹽と牧羊とで大富豪となつた人です。

鐵成金の百萬長者

此他にも春秋戰國時代から秦、漢の時代に鐵成金の百

左様でありませう、この陶朱といふ人の前身は范蠡と云ひ日本人にも馴染のある人で兒島高德が後醍醐天皇の行在所の櫻の木を削つて「天莫空二勾踐一時非無范蠡」と書いた日本にもよく知られてゐるアノ范蠡の事です、この人は初めから商人ではない、初めは越王勾踐の顧問となり勾踐を助けて呉を滅ぼして會稽の恥を雪がしめたが、この范蠡が越の宰相となつた時の豪奢振りを拾遺記といふ古い本にこう書いてあります『范蠡越に相たり、日に千金を致す、家算術に閑ふもの萬人、四方得難きの貨を收め越都に盈積し以て器と爲す、銅鐵の類積んで山阜の如し、或は之れを井甕に藏す、之れを寶井戸といふ、奇麗色閨房に溢る、歴古未だ之れあらざる也』これを通釋しますと范蠡が越の國の宰相となつてゐた時に毎日千金を致すといふのです、千金の千は限られた數でなく澤山の金が入つて來る事を言つたので日本でアノ家は一日に千兩も入つて來るといふのと同じ意味なのです、家算すなはち使用人で算術に通じてゐたものが萬人もあつた(この萬も限られた數字ではなく多數をいふのです)さうして四方得難い所の貨物を集めて、それが越の都に一杯になつてゐたそれでいろ／＼の器具を作つた、また

萬長者は趙の郭縱、蜀の卓氏、宛の孔氏でこの蜀の卓氏といふものは蜀の國(四川省)にをりました、卓氏といふのは日本で三菱家といふやうに向ふでは氏といふのです、この卓氏の近い先祖は趙の國に於て製鐵で富んでゐました、秦が趙を破つた時卓氏は捕虜となつて他所へ遷された、秦になり夫妻が車を推してその場處へ参りますと他所から遷された捕虜も澤山ゐました、彼等の中で少しく餘財のあるものは役人に金を與へて成るべく近い所へ遷されんことを求めましたけれど、卓氏は路は遠いけれど紋山といふところには沃野があつて山芋が出來るから夫妻で堀つて喰つてゐたら終身饑乏る心配はないからと遠いところへ遷ることを求めました、ソコで役人は卓氏夫妻を蜀(四川省)の臨邛といふ處へ遷しました、蜀には鐵山が多いので大に喜びまして「即鐵山一鼓鑄」とあります、鼓と申すのは扇で火を熾にすることを言ふのでフイゴを用ひて鐵を溶かしたのです、即ち冶鐵であります、さうして巧にこれを賣捌いて大富豪となり王公の如き贅澤な射獵などして楽しんでゐたといふのです又同じ臨邛に程鄭といふものがゐりました、この男もまた山東から臨邛へ遷された捕虜ですが、郎へ遷つてから冶鐵で産を起

し富は卓氏と等しいと言はれておりました、蜀は今の四川省で禹貢の梁州の地に當るのです。

鐵商の遊閑公子

また宛の孔氏の先祖も梁の人で冶鐵を業としておりました、秦が魏に代つて孔氏を南陽に遷した時、孔氏は南陽の鐵山を採掘して大に鼓鑄して富豪となりました、この人は「連車騎遊諸侯」と云ふのですから美しく供廻りを連れて諸侯を訪問しました、優々として遊んでゐる様に見えるので世の人が遊閑公子と呼びました、この遊閑公子決して遊閑でなくその間に抜目なく金儲けの工作をしたのです、ソコで南陽の商人は孔氏の雍容を學べと言はれてゐます、これは二千年も前の支那の鐵商ですが、現在のわが東京邊にもこうした遊閑公子の流を汲む實業家がゐるやうです。

節儉家の鐵成金

また曹の丙氏といふのがあつてこれも冶鐵を以て起り巨萬の富を作つたのです、此人は遊閑公子とは反對に非常な節儉家で常に子弟を誡めて「挽有拾、仰有取」と

日本に云ふと「起き上る時は塵でもつかめ」といふのと同じ意味です此人は多くの使用人をして鐵その他の行商をやらした、ソコで丙氏の出た鄒魯の土地では丙氏をお手本にして文學を去つて金儲けに趨るやうな風になつたと言つてゐます、御承知の通り鄒魯といふのは孔子や孟子の出た土地です、その聖賢の出た土地に丙氏のやうな鐵成金が出たので文學を去り利に趨るものが多くなつたと云はれるのですが、鐵成金が一世を風靡したことが知れるのです。

陽泉の鐵鑛

そこで餘り支那の古い鐵の事ばかりを申上げましたが茲で少し新しい事を申上げて見たいと思ひます前に申上げました鐵成金の中の郭縱といふ人は趙の都の邯鄲といふ所に居てそして鐵を業として居りました、又蜀の卓氏といふ人の先祖も前に述べました通り趙の人で冶鐵で産を作つた人です、然らば趙の郭縱や蜀の卓氏の先祖がどういふ所の鐵鑛を掘つたか、之に就て長らく支那にをりまして古今の支那風俗にも通じてゐられます元順天時報主幹山川早水先生にお尋ねしました所返事が參つてをり

ます、これは早水先生が支那に在留の砌、實地踏査されたお談で古い本を涉獵して得たものではありません、先生のお説では郭縱や蜀の卓氏の祖先の採掘冶鑄したのは恐らく今の山西省平定縣の陽泉方面の鐵鑛であらうとの事です、では諸君をこれから陽泉鑛へ御案内しませう、既に御承知の方は記憶を新にして下されば結構です。

趙の都邯鄲から陽泉へ参りますには平漢鐵路石家莊驛で正大鐵路に乗換へると便利で一日で行ける、古は趙の西晋(山西省)の東にある太行山を踰えて参りました、陽泉は無煙炭と鐵を産するので有名であります、陽泉は河の畔にありまして其河の底に鐵を埋藏してゐます、土人は河原に鑿坑を穿つて鑛石を採りこれを轉輸(ろくろ)で坑外に運び出し河を踰えて山地に運んでゐます、此山は大行山脈であつて此山中にも各所に鑿坑があります、陽泉の鐵商は此山地に熔鑛爐を設けて冶鐵をしてゐます、その鐵の多くは銑鐵(ツク)で長さ三尺内外幅五六寸厚さ一寸足らずであつてそれを驢馬で陽泉及び獲鹿縣の方に送り出します、この獲鹿といふところは石家莊から陽泉に至る所の途中にあります、そこには鐵の匠人或は鐵商が非常に澤山居ります、その鐵は農具に使ひ或は鍋釜、

爐器、双物といふ様なものに作つて北支那一帯に供給してゐるのであります、彼の歐洲大戰當時には日本へも参りましたが硫黃を多く含んでゐるため日本では餘り喜ばれなかつた、しかし當時鐵の需要が甚だ急であつたからその輸出額巨額に上つたと申します。

陽泉鑛に硫黃の多いのは鑛材そのものに硫黃の多い山西省の無煙炭を使用しますため、その熔鑛爐は多く、山間の平地に設けてあつて、その構造は全然昔風であります、然し最近では最新式の機械等の設備をしてやつてをりますから何れ多く鐵が出る、思はれます、この山西省に於て最も多く鐵を産出せられるのは陽泉であります、その次は山西省の南の方の澤州であつてこの澤州の鐵は陽泉の鐵に比べて質がなか／＼良いといふことでもあります、歐洲戦争の時に多くこれも日本へ輸出されました、尙ほ現今著名の鐵鑛は山西省以外に桃冲山鐵鑛、大冶鐵鑛、鳳凰山鐵鑛等があります、また最近(十月)接手しました東邦協會の調査資料に依りますと山西省の平緩治線の宜化、新開地方にあるもの及び雞鳴山の鐵鑛は廣大なる床をなして甚だ有望なもので早晩我國で開發されるものと思はれるとあります。

會稽山の餘糧

なほ一つ皆さんに御参考までに申上げて置きたいのは餘糧のことです、餘糧といふのは禹が會稽山の（今浙江省紹興にある）参りました時、使用した糧食の残りをごへ捨てたそれが固まつて金甌のやうになつてゐる、之を餘糧と名付けたのであります、これも昔は餘り關心を拂はれなかつた、然るに最近はこちらもなか／＼新しい方法で更に熔鐵致しますとかかなり鐵分がそこから出るといふことであります、それに就いて大毎の編輯顧問で支那の事情に精通してゐられる澤村幸夫君がいろ／＼調べて呉れました、こゝに面白いことはその餘糧といふものが日本にもあるといふことでこれは澤村君自ら調べたのであります、それによりますと美濃國土岐津町の西南部を圍む丘陵の中で字名西山の小屋洞に面した所の山地からこの餘糧といふものが出ます、この地方の人はこれを壺石と申してをります、この壺石は土岐津の名物となつてゐるが美濃の東部から尾張の北部にも出ます、この餘糧は第三紀鮮新會の最上部に位する所の厚い礫層の下部に包蔵されてゐる一つの結粒で形は球型或は楕圓型にな

つてをつてその大きなものは五〇ミリ小さいものは五ミリその皮殻部は含鐵、硅質、粘土によつて膠結された所の礫石及び粗砂であつて、核心部には小礫と砂と陶土を交へてゐる稀に水を含んでゐる、そしてその砂礫を取除けば水を盛ることが出来まして壺石と名付けてゐる、支那でいふ所の禹の餘糧は鈴石の類で日本に産するのは太一餘糧で支那のとは少し違つてゐると専門家は言つてゐるさうですが普通は壺石即ち禹の餘糧の名で通つてゐます、昭和九年一月三十一日に天然記念物になつてゐますそれで現在美濃の土岐津町にあるのは天然記念物であるから採掘する事は出来ませんがしかし他に美濃の東部から尾張の北部にも出ると申しますから最新式の方法で試験をして見るのも面白からうと存じます。

日本の鐵

支那の戰國時代に製鐵が大に起つたことは前にお話しした通りですが、然らば日本の戰國時代に使用した武器は何處の鐵を用ひたかといふ疑問が當然起つて参ります、ソコで脇路ではあります但し日本の鐵の事をかいつまんでお話しして見たいと思ひます、之は専門に研究されてゐる

方もおありであらうし私の杜撰なお談をするのもどうかと思ひましたけれど前に申したやうな疑問を解くために必要なのでお談をする事にいたします、日本では神代から鐵を産してゐまして出雲の簸川の砂鐵は良質であつてこの砂鐵で鍛はれました刀劍には寶劍として輝いてゐるものもあると承はつてゐます、有史時代に入つては短甲と申す鐵の冑が出来てゐますし、また衝角の唯付いてゐる鐵の甲などもありまして之等の上古の鐵製の甲冑は腐蝕した儘出土してゐますしまた埴輪に作られたのが古墳等より發見せられてわれ等は上代人の武裝を見る事が出来るのです、従つて日本には上古から砂鐵の採收鐵鑛の採掘が行はれてゐたことは明です、奈良朝時代から平安朝時代に屢々日本へ参りました渤海國の使節は日本から鐵を求めたためであつたと傳へられてゐます、渤海は今日の遼寧沿海州から北鮮一帯にかけて國を樹て、ゐたので自分の領土内に鐵山もある筈であるに日本へ鐵を求めたに参つたのに當時日本の採掘冶金術が進んでゐて渤海はそれが幼稚でなかつたのかと想はれます、尙ほ平安朝の末期から足利時代に及び對支貿易には日本の刀劍類が輸出せられ彼地に於てもその精銳が賞美せられましたのは

宋の歐陽修の日本刀の歌などを見ても知られます、その時代に支那には鍛刀術が衰へて良劍が出なくなり日本から輸入の刀劍が光彩を放つたものと思はれます。

鐵鑛と名匠

日本の刀劍の歴史を見ますと優良なる鐵の産地又は其附近に名匠が出てゐます、奥羽の月山、舞草等を始め山陰では伯耆、出雲、中國では三備地方、仲仙道では美濃等に刀劍の名匠が出てゐますのはその地方に良鐵を産したからです、上古香具山の鐵を以て劍を鍛へたといふ言傳へがあります香具山に鐵を産したかどうか、これは尙ほ調べて見ねばなりません或る鑛業の書物に日本の磁鐵鑛として挙げられたもの、中に「大和の洞川」が出てゐます、この洞川の鐵は何年頃から採掘されたかは知りませんが、大峰山に近いところにあるので恐らくは早い時代から採掘されたものと考へられますが、大和には上古から刀劍の名匠が出てゐます、その他磁鐵鑛として挙げられたものを見ますと釜石鑛山（岩手縣釜石町）仙人鑛山（岩手縣和賀郡岩崎村）栗木鑛山（岩手縣江刺郡米里村）等を重なるものとして他に上野の中小阪（群馬縣北甘樂

郡小阪村(中小阪) 信濃の大日向(長野縣南佐久郡大日向村) 美濃の飯地(岐阜縣加茂郡飯地村) 越後の赤岩(新潟縣北蒲原郡赤岩) 等を掲げてあります、その他砂鐵は北海道、奥羽、關東、北陸、山陰、中國、九州等の産地を掲げてあります、が煩はしいので略して置きます、尙ほ最近「大日」といふ雜誌に赤堀又次郎氏が常陸の鹿島半島に今も砂鐵の出るところがあるがそれは潮流の關係で奥州から流れて來たのであらうと言つてゐます、兎に角日本には上古から鐵を産してゐたのですから戰國時代の武器に使用した鐵は國産であつたらうと考へられる、或は南蠻鐵を輸入したのではないかと疑はれますけれども南蠻鐵を武器に使用したのは徳川時代に入つてからで、南蠻鐵で鍛へた刀は新刀であつて古刀にはこれを見ないと愛劍家で趣味の考古會の會長をしてゐる八木博君が私に談して呉れました、尤も堺で造りました鐵砲などは南蠻鐵を用ひたかと思ひますが詳しいことは調べて居りません。

鐵を中心とせる歴史

もし鐵を中心として日本の歴史を見ますと興味が多い

に恐れられてゐたのである、また楚の龍泉、秦の大河は支那の名劍として知られてゐます、尤も秦、楚の強國であつたのは鐵ばかりでなく他にいろいろの原因もあつた、山川早水先生は楚は三苗の故地を收め、悍勇の戰士を有してゐたのと、秦は胡地に接近して匈奴族と混血しその蠻勇の氣質を享けて戰爭に強かつたのであると言はれてゐる、秦の兵士は戰爭に臨むと敵を殺してその血をす、り片手に敵の首級を提げ片手に劍を鞘して敵陣に突撃をしたのださうです、又秦の強かつたのは甘肅、四川の奥に蟠居してゐたる羌戎と云ふ蠻族を怯踏して味方にしたのです、この蠻族は强悍でありて今日でもこの蠻地に入るには護衛兵を附けぬと危険であります、就中四川にゐるローロー族は最も強暴であります。

上代の鹽鐵政策

これから上代の支那に於ける鹽鐵の政策に就てお話いたします、日本で煙草專賣とか鹽專賣とか行つてゐて、あれは西洋から教へられたやうに考へてゐるが支那では漢の武帝の時代に既に鹽鐵の專賣制度を布いてゐる、この時代何故專賣法を布いたかといふと漢の武帝の時代に

ものがあります、平安朝の時代に出羽の阿部氏(後、安東氏) 奥州の藤原氏が何故に奥羽に勢力を有してゐたかそれはその地方に鐵山を有して精銳な武器を造りこれを蓄へてゐたからである……固よりそればかりで強大になつたのではありませんが……豊公が中國攻めの手始めに播州の三木城を攻略したのは地理の關係にも依りますけれども播州に於ける鐵の産地を手に入れやうとした軍略から出たのではないかと考へられる、御承知の通り三木は今日でも刃物を以てその名を知られてゐます、山陰に日子氏が勢力を占めてゐたのも出雲、伯耆の鐵の産地を勢力範圍に收めてゐたからであらうと思はれます、これは日本ばかりではなく、支那の戰國時代に秦の國と楚の國が七國の中で最も勢力を有してゐたので秦は雍(今西安)に都して今の陝西、甘肅、四川の三省を收め楚は荆(今荆州)に都して今の江蘇、安徽、湖北、湖南、江西を掩有してゐました、何れもその領内に豊富なる鐵の産地を有してゐた、現在日本と關係のある湖北省の大冶鐵山、象鼻山、安徽省、桃冲、當塗の鐵礦等は何れも楚の領地の内に屬してゐます、ソコで秦、楚の堅甲利兵は他の國

支那の西北にをります匈奴といふ所謂蒙古族が非常に跳梁して段々支那本土へ侵略して参りますので武帝はこれを積極的に撃退しやうといふので大軍を起して所謂匈奴の根據地へ攻め込んで行つたが夫と共に又國境に防備をしなければならぬ、之は大變なことであります、匈奴の大討伐を敢行するには多大の軍費を要しますソコで國帑が足らなくなつて來た昔時は紙幣等はなかつたが漢の武帝が初めて獸の皮で紙幣のやうなものを造つて貨幣に代へたまた屢々貨幣の改鑄を行ひ段々貨幣を惡質のものに落しました、處が開戦の費用は莫大に上り國防費は多額で國家の負擔は益々加重して参ります、また一方武帝の積極策のため支那の領土は非常に擴大され西はずつと東羅馬の國境にまでその勢力を及ぼして東羅馬との交通も開かれました、支那の領土が擴張せられた爲め非常に世帯が大きくなり世帯が大きくなれば費用も餘計要する譯であります、そこで民間で以てやつてゐた鹽鐵を取上げて政府が專賣局を設置して政府が賣つてそれで國用に足したのであります、この制度等を調べ上げれば古代支那經濟史として面白いと思ひます。

鹽鐵の專賣制度

なほ支那では先秦時代から漢初にかけて鹽鐵の成金が輩出しその富豪も澤山出て居りますが國家危急の場合支那人は國防獻金をするものはない、唯偶々奇特な者がやつて見てもその人一人だけであつて其後へ附いて來るものがないのでそれで專賣制度を施行した、然らば買収金は幾らかといふに、夫についてなか／＼うまい事をやつてゐる、製鐵の大商人、製鹽の大商人或は千萬長者、百萬長者を專賣所の役人に取立てた、その一番の首長は大農と稱し大藏大臣、農、商工大臣、鹽鐵專賣總務長官といふ大きな權力を持つてゐる、此大農には難陽といふところの商人の息子で天性計算に精しいといふので十三歳で宮中に入つて待中となつた桑弘羊といふ財政家を登用しその下に鹽鐵丞(鹽鐵事務長官)として齊の大製鹽家の咸陽と、南陽の大製鐵家の孔僅といふ有力者を起用した皆サンも大金持が役人になつてつまらんと思はれるが昔の支那では商工業者を賤んで漢の高祖の時代には商人は絹を着る事、馬車に乗る事を許されなかつたほどで無論役人にはなれない、さうして武帝の時に至る迄商人

は絶対に役人には登用されなかつた、然るに鹽鐵專賣制度を施行するに當り製鐵や製鹽の大商人を役人も役人、日本で申すと勅任の上位に登用したのですから、鹽鐵の千萬長者、百萬長者の人達も喜んでなつたと思ひます、又その人達は鹽、鐵のことについては知識も豊富であり従つて政府の方もさういふ人々を登用したことは鹽鐵の專賣制度の運用上非常に都合が良かったことは勿論であり、また當時鹽鐵の專賣制度を施行するに就いて從來の慣例、格式等を破つて多くの商人を專賣局の官吏に登用しました、これは思ひ切つた改革であります、人民の租税に依つて衣食をしてゐる官吏が市肆にあつて商賣をするのは何事であるかと非難するものもありましたが武帝はさうした輩に耳を藉さずにこの新制度を斷行したのです。

國家産業統制

又均輸準法と申しまして、大體今日の日本の米穀法を一層擴大しました國家産業統制法といふものが漢の武帝の時代に實施されてゐるのです、即ち支那の各地に産します所の諸産物を中央の都市に集め政府で管理統制致

しまして物價の安い時に買ひ上げ高い時に賣りまして物價の調節を圖つて政府が其間に利益を得やうといふ方法を施行しました、斯ういふ制度を漢の武帝は用ひてそれで國防費を支出し一方種々の大土木事業を起して運河を開鑿するとか、壯麗な宮殿を造るとか、莫大なる費用に充てました。

鹽、鐵專賣の制度が軍事と關係してゐるといふことが面白いと思ふ、即ち漢の時代に外國との戰爭或は戦後の經營といふものを圖つた時には斯ういふ制度が行はれてゐる即ち日本に於ても鹽專賣、煙草の專賣は桂内閣で行つたものであつて所謂日露戰爭の戦後の經營の一つとしてこれを行つたのであります、それが後になつて今日までつと續いてゐる、なほ又米穀法といふやうなものも物價の調節を圖るためにこれが出來たのでありますけれども一つは政府はそれによつて多少の口錢利益を得るためであらうと思ふ、米穀が堂島でも昔ほどの取引が出來ない、それだけ政府が儲けやうとするからであらうと思ふ、即ち米穀法を強化すればするほど商人の利益は薄くなるのです、これは皆サンの御意見を伺つてみないと分りませんが端的に言へば私はさういふ風に考へられるの

です、又近頃米穀の專賣を國で行つたらどうか或は日本の絹の貿易を政府が統制する、丁度ロシアがやつてゐるやうに絹の貿易にしても個人でやらす國の貿易として政府が海外の輸出貿易を行ふ、個人貿易といふよりもむしろ國でやるといふやうな事は新しいやうに聞えるが二千年前既に漢の武帝が支那の實業界の巨頭を集めて鹽や鐵の專賣法や、國家産業統制法等を實行してゐたのであります。

規模の統一

また當時漢の武帝が鹽、鐵の專賣制度を施行するに當りまして民間で鹽を煮、鐵を鑄ることを嚴禁してその製品を沒收するのは勿論、違反者には足枷を施して罰しました、また鹽を煮る器具とか鐵を鑄る用具等は政府で造つたものを使用しました、また鐵器其他用具の規格を統一しました、また規格の統一といふことは日本で八蓋敷く云つて重要工業品には實施されてゐるやうですが、支那では二千年前に既に實施されたのです、こゝにいふことを調べて見ると興味が多いのですが何分にもその用語が六ヶ敷くて解釋が二様にも三様にもなつてゐるものがあ

り、普通の漢學者などには、とても解り憎いのです。といふのは當時の商業社會に用ひられた慣用語で今は死語となつてゐるのや、また一地方の土俗の言で文字通りに解釋が出来ないのであります、その例をお話するとよろしいのですけれど例が入ると複雑難解なものでありますので略して置きます。

斯ういふやうな新制度の結果はどうであつたかと申しますと一時はそれがため非常に國家の金が殖え又事業も起つて表面は景氣がよかつた、處が次の時代になると不平が諸方から起つて來た、鐵の商人鹽の商人等は政府が左様なことを行ひ利益を占める結果民間のものは殆ど儲けがなくなり商業が衰へたといふので不平の聲が起つて來た、尤も武帝の時に於てもそうした不平の聲があるにはあつたが嚴峻なる法律で人民の口を箝んじ甚しいのは腹誹法と云つて口には出さないけれども顔に不平の色が見えろと之を拘致して嚴罰に處し本人は勿論一族まで所罰されたので何れも戦々兢兢々としてその不平を抑へてゐたのです。

鹽鐵政策の理由

古代の國家社會主義

財政上の理由は前にも略お話しした通り製鐵及び製鹽の如き有利の事業を人民の手に任ねてあつたから富豪大家が貧民を便役して事業を營み利益を壟斷して王侯の如き贅澤なる生活をしてゐるのに反して國家の財用は益々窮乏を告げるのであるから製鐵や製鹽の如き有利の事業は國家の管理に移して國家の財政を豊富にせねばならぬといふのであります、武帝の時代には前に述べた通り邊疆多事で屢々大軍を起して匈奴を征伐し、また邊疆に伐兵を置いて匈奴の侵入に備へ正に國家の非常時であつた、然るに治鐵煮鹽の如き事業を營んでゐる豪族は萬金を累ねながら國家の急を佐けようとしな、さうして細民は益々困窮をしてゐる、こうした時代に製鐵及び製鹽の國家管理を斷行したのです、わが國に於ても國家社會主義者等は富豪財閥の壟斷を防止するため重要産業の國家管理を唱へてゐるものもありますが既に二千年以前に支那に於てその説の實行されてゐるのを見ますと重要産業の國家管理などは決して新しい説でないのであります、唯その結果如何といふことが我等の参考となるのです。

これから有名な「鹽鐵論」のお話に移るのですが、その前に鹽、鐵の國家管理に就いて前段の談話の足らぬところを補ふて申上げます、漢の武帝の時代に鹽及び鐵を國家管理に移すには二つの理由があります、その一つは前に申した財政上、他の一つは政治上から來てゐるやうです、政治上の理由は鹽と鐵は天下の大用で國家が管理すべきもので人民が私に管するものでない、然るに豪族大家が山海の利を管して鐵を鑄たり鹽を煮たりしてその利益を壟斷してゐる、そして一家で多くの労働者を集め多いの一千人以上にも及ぶ、またその鑛山の労働者や鹽田又は鹽山（支那では岩鹽及び山鹽を産す）の労働者には浮浪無頼の徒を聚集して使役してゐる、彼等は遠い郷里を去り墳墓を捨て、豪族大家を頼んで深い山（鑛山）や奥深い澤（鹽を産する地）に聚つて不正な事をなし徒黨を作つて權力を占め益々惡事を行ふ、こうした地方は政令が行届かぬので豪族が權力を占め事變に乗じてその徒黨を集め蜂起し四方の地を略して王となつたものさへあつた、であるから國家の治安の上からも製鐵、製鹽は國家事業として國家の權力を以つて禁働者を統御し彼等の私曲橫暴を禁遏せねばならぬといふのであります。

鹽鐵の專賣は政府としては成功して一時國庫を充實せしめたけれど人民のためには決して便利でなかつた、第一官製の鐵器は粗悪であつて値段が高いのでそれを取扱ふ商人の利益が薄く、またこれを需要する人民も喜ばなかつた、日本では官で造るのはその質がよく民間で造るものは利益を主とするので品が悪いなど考へてゐるものもあるけれど競争のないところに値段が廉であつてさうして良い品の造られる譯はないのである、それは二千年以前支那に於て疾くに實驗済みの事實であります、鹽鐵專賣に對する民間の不平はいろいろあつたが製品の粗悪で値段が高かつたといふのもその不平の一つであつたのであります。

王道派と功利派

漢の時代に有名な鹽鐵論の起つたのは武帝の次の皇帝昭帝の始元六年で我國の崇神天皇の十七年に當り約二千年程前であります、昭帝は民の疾苦を問ふため諸縣に詔し賢良文學の士を朝廷に召しましたその重なる問題は武帝の時に始めた均輸平準法、鹽鐵專賣、その他新法の利害でありました、さうして宮中に於て政府の有司と諸郡

縣より召された賢良文學の士との間に熱心なる討議が行はれました、後漢の桓寬が著しました「鹽鐵論」はその筆録でありまして日本では舊幕時代に防州徳山藩で翻刻發行して今も尙ほ行はれてゐます此書は全部十六卷、中之島の圖書館にあります、當時の様子はこの鹽鐵論を閱讀すると能く解るので試みに賢良文學の士を代議士に擬すると有司は即ち政府委員であつて、賢良文學の士は王道仁義論を以て新法を攻撃し政府の有司は現實功利論を以てこれに應酬した、その筆録は恰も熱と力の籠もつた議會の討論筆記を見るやうで二千年後の今日に至つても尙ほ生彩を放つてゐます。

鹽鐵法の最期

その討論の要旨をお話すると政府委員（大農、鹽鐵官均輸官等）は今日國家の急を救ふには古い制度では駄目である、どうして新法を繼續せねばならぬと主張し、また國防問題に就いて若し當時新法を斷行しなかつたらば如何にして出征の兵士に糧食を供することが出来やうか、こゝにいふ新法をやればこそそれが出来たのでないかと鋭く切り込んでゐる、これに對して賢良文學の士は王

道政治といふものは左様なものでは決してない、こゝいふやうな民と利を争ひ民を苦しめる法は間違つてゐる。そも／＼王道政治は仁義を以て國を治めるものである匈奴などが冠して來るのは中國に於て仁義の道を行はなからだ、よろしく元へ復つて王道政治を以て進めばよいと述べ、所謂功利主義の新法を廢するのが國家のため急務であることを力説したので、斯様に賢良の文學士は王道仁義論で進み政府の有司は現實功利論で應酬したのでその場では結論に達しなかつた。

新法の改廢

しかし結局に於ては王道仁義論が勝を制して均輸平準法は昭帝の時代には制度そのものは存じてをりましたが實際は餘ほどこれを緩和したので、また鹽鐵の專賣は殆ど廢止されました、尙ほ武帝の時に酒の私釀を禁じて政府專賣となつてゐましたが、これもその禁を弛めさせた、鹽鐵論は漢の時代に止らず殆んど支那歴史に起つてゐるので常に王道政治派と功利派とがこの問題で衝突して政治上の論争を惹き起してゐるのである、後世宋の時代は東坡等が王安石の新法に反對したのも東坡の王道仁

義説と安石の現實功利説との衝突と見られるのであります、尙ほ上代の支那の鐵に就いてはお話すべきものもありませんが先づこの邊で止めることに致します。

(終)

古代支那鐵物語 (遺補)

古代支那鐵物語に漢武帝の時代に支那産業の大宗である鹽及び鐵の專賣を斷行した平準均輸の法に依つて産業の生産分配の統制を行ふた事を書いたが、近刊の歴史地理に石井孝氏の「幕末に於ける幕府の國產統制計畫」を掲げてあるが未完であるけれど産業統制といふことが既に舊幕府に於て企畫せられたことは、すべて新しい制度は西洋から來たやうに思ふてゐる人達の蒙を啓くに足るものである。

x x

安政年間幕府が開港を斷行するや日本の重要産物が海外に流出して物價は日増に騰貴し金銀座の貨幣の引換が停滯し錢相場が上り庶民が困難したのでその對策を關係者に諮問し、ひところ幕府で産物會所を設立し産業の統

制、貿易の統制を行はねばならぬことを答申した、しかし當局者は物價高低の權が商人の手に歸し居る有様では不都合であることを認めてゐるけれど尙ほこれが實行に就いてはいろ／＼困難があるので衆議を盡さねばならぬと上申をしてゐる、諸國物産會所は從來商人の手で取扱つてゐた生糸、米穀その他重要物産を一纏めに會所へ集中してこれを入札拂ひとなし物價の平準を圖らんとするので、その方法は公領と私領を問はずその地に産する重要産物を幕府の船で輸送して物産會所へ集中するのであるが、これに對して反對するものも多かつたのである、その中に商人の手で扱ふてゐるものを役人の手で扱ふやうになるとすべて手重になるので却つて不都合なる事が起ると言つてゐるのである、これは官營の急所を衝いたもので役人といふものは昔も今も變りなく權威を裝ふために物事を大層に取扱つて輕便臨機の處置をやらぬ、又官吏は商業に馴れてゐないので商機を失して却つて商人に利せられてゐるのは現行の米穀法が明かに證明をしてゐるのである、漢の武帝時代に商人の感じたる不便は舊幕の商人も同様に感じ、昭和の今日もまた同様である

尙ほまた興味のあることは國家統制の反對者が支那の王道派の思想を繼承して民と利を争ふのを不可とした事である、これに對して統制派は今日の難局を救ふには貿易の統制を行ふの他なしと王道派の説を駁して民と利を争ふのはよろしからずなどいふ論は「畢竟後世の毛唐人共の學に抱泥して大切の天下治平の大經濟道を會得なきもの」であると稱して王道派に對して反對をしてゐる、この議論は二千年前支那に於て鹽鐵論の起つた際に政府當局者(統制派)と賢良文學の士(王道派)との對立の意見であつて、それが日本に於て幕末に繰返されてゐるのを見ると、天下に新しいものはないといふ私の持説に裏書するものであるが、それと共に私は歴史の研究の大切であることを世人に勵めんとするものである。(終り)

(代 騰 寫)

昭和十年十一月二十五日 印刷
昭和十年十二月一日 發行

【非賣品】

發行人 深 浦 虎 雄

大阪市西區南堀江上通一ノ二九

印刷人 今 田 忠 兵 衛

大阪市西區西長堀北通一丁目
岡谷合資會社大阪鐵部内

發行所 大阪鐵商雨露會

終